

安芸太田 歴史

考古学者は、ここで縄文時代（紀元前 10,000 年-紀元前 300 年）にまで遡る土器を発見しており、このことは、安芸太田において数千年にわたり、人間が住んでいた可能性があることを意味します。江戸時代（1603 年-1868 年）には、この地域は中国地方の伝統的なたたら製鉄の中心地の 1 つとなりました。たたら製鉄では、足で圧力を加えるふいごを利用して、粘土製の炉に空気を送り込みます。製鉄は、ここでは、江戸時代初期に始まりました。当時、佐々木家（のちに加計家として知られることになる）が経営する隅屋が、加計地区でたたら製鉄を始めました。隅屋は、森の木材（燃料用）や中国山地の砂鉄など、地元地域と他の地域の両方の天然資源を利用しました。この地域は最終的に、製鉄で日本中に知られることになりました。

安芸太田を流れる太田川は、鉄の輸送に重要な役割を果たしました。周辺の山々の砂鉄を溶かすたたら炉は、加計や戸河内などの上流地域に位置していました。ここから、川船が錬鉄（砂鉄から溶け出た原鉄）を現在の広島市にある鍛冶屋へと運んでいました。そしてここで、針やヤスリ、鋸などの製品に鍛造されました。製品は瀬戸内海に沿って商業の中心地、大阪へと運ばれ、ここから全国あちこちに運ばれました。

江戸時代の末期になると、隅屋が西日本で最大の鉄製品問屋の 1 つになりました。しかし、明治時代（1868 年-1912 年）後期になると、安価な輸入鉄と西洋流の製鉄技術が日本に導入されたことにより、たたら製鉄は急速に衰退しました。たたら製鉄の遺産はそれでも、広島県で目にすることができ、この地域の針製造業や繁栄している自動車・造船産業については、少なくともその成功の一部は、たたら産業の歴史のおかげなのです。